

特集：企業内診断士、定年後の世界

第2章

【定年前】

人前で話す講師として道を切り開く

庭山 正志さん



竹田 和朗

千葉県中小企業診断士協会

東京都内のメーカー系システムインテグレータ（以下、SIer）に勤める企業内診断士である庭山正志さん。これまでパッケージソフトウェアの企画・設計・開発や、コンサルティング営業としてセミナー講師などで活躍してきました。現在57歳で、3年後に定年を迎える予定です。庭山さんにこれまでのビジネスキャリアの振り返りと定年に向けてのプランを語っていただきました。

【庭山正志さんの略歴】

1960年生まれ

1981年：メーカー系 SIer 入社（20歳）

1984年：システム開発子会社出向（23歳）

1997年：メーカー系 SIer へ出向復帰
（36歳）

自社開発パッケージソフトウェアの企画・設計・開発に従事

2008年：コンサルティング営業部門に異動（48歳）

2013年：中小企業診断士登録（52歳）

2017年：開発部門へ異動（56歳）

2021年：定年予定（60歳）

COBOL 言語などでの開発に3年間従事していました。その後、新設されたシステム開発子会社に出向、システムエンジニアとして会計、給与計算を中心とした基幹システムのスクラッチ開発を数多く経験することになります。結局、子会社には13年ほど在籍していましたが、今の会社に復帰後は、それまでの豊富なシステム開発経験を生かし、自社パッケージソフトウェアの企画・設計・開発全般を主導する立場になっていきました。庭山さんは「子会社時代に数多くの基幹システムを経験したことがパッケージソフトウェアの構想や開発に役立ちました」と語ります。

2000年には、会社の営業担当者から「庭山さんはしゃべりがうまいから、セミナーをやってみませんか」と声がかかったことをき



庭山正志さん

1. 定年を意識するまでの振り返り

(1) 庭山さんのビジネスキャリア

庭山さんは、1981年に現在の会社に入社し、当初はプログラマーとして、アセンブラや

かけに、自社パッケージソフトウェアの企画・設計・開発に従事しながら、第一線で数多くのセミナー講師を務め、実績を残してきました。

2008年にコンサルティング営業部門に異動した後もセミナー講師活動を継続していました。昨年4月からは、プログラム開発部門を管理する職務についています。

(2) 定年後を意識した研修

2013年の高齢者雇用安定法の改正に伴い、各企業では、高年齢者の労働力を継続して雇用するための制度づくりが進められています。また、多くの企業では、50歳代半ばの社員に対し、キャリアプランについての研修が実施されています。

庭山さんの会社も同様に、60歳が定年ですが、希望すれば65歳までの再雇用制度があります。定年に向けては、50歳になったときに第二の人生を考える2日間のセカンドライフ研修が用意されています。さらに57歳になったときにも、60歳以降の人生を考える1日のキャリアデザイン研修があるといいます。

庭山さんに定年を意識した時期を伺うと、50歳のセカンドライフ研修のときだったようです。

「それまではどうにかなるだろうと思っていました。ところが、生活資金の計算などの研修を受けて、年金受給が65歳からとなったことで、このままでは60歳以降の生活資金がなくなるので、どうにかしなくてはいけないと思いましたね。また、定年になると生活が不規則になり、健康を維持できるかどうか不安でした」

2. 定年後に向けた準備と葛藤

(1) 今後のキャリア形成のきっかけ

会社の研修を受けて定年後を意識するようになったという庭山さん。定年後に向けて準備をしていることは特にはないというものの、人脈を広げることは意識しているようです。

特に、実務補習や実務従事が一緒だった診断士とはつながりが強く、よく懇親会なども行っています。診断協会の実務従事や研究会などで知り合う方々は優秀でさまざまな能力を持っている方が多いので、毎回新たな発見があります。将来、一緒に仕事をしたいという希望もあるそうです。

「今は必ずしも診断士資格そのものが今後のキャリア形成の中心とは考えていない」というものの、資格をきっかけとして人と出会うことが、キャリア形成の役に立つと考えているようです。

(2) 診断士資格の取得理由

庭山さんは、診断士資格取得の勉強を始めた時点では、「定年後のこととは直接結びつけて考えてはいなかった」と振り返ります。

資格取得の理由は2つ。

1つ目は、長年かかわってきた少年野球のコーチ、監督を引退したことで休日の自由時間ができたことです。庭山さんは、自分の子どもが少年野球チームに入ったことをきっかけに、少年野球のコーチ、監督として15年間、休日のほとんどを少年野球につき込んできたそうで、引退後は資格取得の勉強に集中できたと話します。

2つ目は、これまで総務、会計を中心に幅広い業務分野でITシステムに携わっており、自己啓発として自分の知識や経験を形にしたい、士業の資格を取って、自分の人生をより良くしたいと思ったことだといいます。

(3) 独立診断士は覚悟が違う

診断士試験には、独学で3年かかりで合格しています。2回目の2次試験で合格しなければ、会社を辞めて中小企業大学校の養成課程に行くつもりで、先に申込みもしていたとのこと。

「そのときは、『早期退職してやってみよう』と妻にも話していました。妻はびっくりしていましたけれど」

当時は、3年かけて猛勉強をしていたこと



や、50歳を過ぎて子どもが社会人になっていたこともあって、診断士としてやってみる気持ちでいたといいます。

「妻も『じゃあ、私も働きます』といった感じでしたが、合格したのですぐにやめることもないと。それで現在に至る感じですね」と打ち明けてくれました。思いとどまった理由を尋ねると、企業と自営業との仕事の違いを挙げています。企業の仕事の多くは組織で行う共同作業であるのに対し、診断士の仕事の多くは単独作業なので、自分がすべてであること。合格後、独立している診断士の方々と接し、自営業で生きていくには覚悟が必要だと感じることもあったようです。

「企業にいれば、しっかりと覚悟をしていなくても、大きな船に乗っていれば何とかなってしまう。診断士は、自分で舟を漕がないとどこにも行けない。自営業で生きていくには覚悟が必要で、資格があれば何とかなるような甘いものではないということが改めてわかりました」

(4) 会社への愛着と複雑な思い

庭山さんの会社への愛着は強く、再雇用も定年後の選択肢に残しています。しかしそこには、60歳を過ぎて再雇用というスタイルで仕事をするのが想像しがたく、はたしてモチベーションを維持できるだろうかという複

雑な思いがあります。

「頑張ったし、長年働いた会社への愛着はあります。とはいえ、60歳を過ぎてもしがみつきたいといったことはありません。それから、後輩たちが仕事を推し進めづらくなるのではないかという気持ちもあります。どうするかは、もう少し考えたいと思っています」

3. 話すことで新たなステージへ

(1) 人前で話すときは本気で取り組む

庭山さんが最もモチベーションが上がるのは、セミナー講師として人前で話すことだといいます。

会社では、コンサルティング営業としてセミナー講師を数多く務めてきました。テーマは主に会計・総務分野の内容で、会計系では、電子帳簿保存法、消費税、減損会計、リース会計基準、国際会計基準、内部統制など、総務系では、改正労働基準法、就業管理、マイナンバー制度など実績は豊富です。

現在は開発部門に所属しているため、会社の業務でセミナー講師を担当する機会はありません。しかし、システム開発にかかわる部門にいて、ITのキーワードであるAI、IoT、RPAなど話そうと思えばネタはたくさんあり、力を持って余している様子です。その分、社外の研究会などで発表するときは本気で取り組んでいるといいます。

「人前で話したり、人に教えたりする以上は、誰よりもわかっていないとできません。大きなプレッシャーを感じますが、その準備作業

庭山正志さんのセミナー講師実績例

会計系テーマ	電子帳簿保存法、消費税、減損会計、リース会計基準、国際会計基準、内部統制等
総務系テーマ	改正労働基準法、就業管理、マイナンバー制度、ダイバーシティ、健康経営等

が最も勉強意欲がわき、最も頭に入るので好きです。準備作業の集中力と話す力を生かすことができるというと思います」

(2) 診断士登録後の活動

庭山さんは、2013年8月に登録し、現在、東京協会城南支部に所属しています。同年代の企業内診断士がいることもあって、城南支部のチームコンサル研究会に参加しています。

研究会は、コンサルツールの紹介やビジネステーマについて、会員が持ち回りで発表する場になっているとのこと。庭山さんは、人に与えられた未経験のテーマであっても手を抜くことはありません。準備としてテーマに関係する書籍を最低10冊は読破したうえで、パワーポイントで30頁くらいにまとめてから発表するようにして、セミナーコンテンツの蓄積に努めています。

また、将来は地元地域の中小企業に貢献したいこともあって、NPO 品川区中小企業診断士会に入会しています。同診断士会は、創業支援や会計処理の手ほどきセミナーの開催を通じて、NPO で地域の人たちに貢献したいという考えで活動している団体です。

庭山さんも、定年後はこのNPOを通じて、地元の中小企業や個人事業主に対する経営相談・IT相談・セミナーなどの経営支援を行っていきたくて考えています。

(3) 話すことで勝負する

庭山さんは、定年後の現実問題として、親の介護ケアを含む自分と家族の健康を第一に考え、年金受給までは質素な生活を心がけて、生活費を稼ぐためなら診断士に限らず何でもやる気持ちでいるといいます。

その中でも、人前で話すことが好きなので、中小企業や個人事業主の方々にとって、商売のためになる新しい情報を提供するセミナーや研修を中心に実績を残し、堅実にキャリアを積み重ねたいと考えています。

また、診断士として通常期待される知識（事業承継・補助金申請・健康経営・HP作

成など）の蓄積も積極的に行っています。

「これまでは会計系や総務系のテーマのセミナーが多かったですが、一般的に税理士や社会保険労務士にはできない分野、たとえばIT、AI、IoT、RPAなどを絡めたテーマのセミナー、研修の講師として、『話す』ことで勝負していきたくて思っています」

4. 置かれた場所で咲く

数年後、定年は65歳になり、やがては70歳に引き上げられるともいわれています。庭山さんにそういった時代を迎える次世代の企業内診断士へ向けてメッセージをお願いしたところ、独立志向ならば早く独立したほうが良いと思っているものの、それほどでもないならば、今の仕事を精一杯やるのが第一義であると考えているようです。

「定年後のことを考えながら仕事をするとは何か違うと思います。それは正しい人間の生き方ではないような気がする。50歳を過ぎれば、こういうテーマを考えていくべきだけれど、それまでは考える必要はないと思います。

まずは『置かれた場所で咲きなさい』ではないけれど、今の仕事をしっかりやりなさいと言いたいですね」

庭山 正志

(にわやま まさし)

2013年中小企業診断士登録。東京都出身。Slerにて会計・総務系の自社パッケージシステム企画・開発・販売に従事。関連するセミナー講師活動経験は多数あり。



竹田 和朗

(たけだ かずろう)

2013年中小企業診断士登録。現在、Slerにて、製造業向け基幹業務のシステム企画などに従事。また、企業内診断士として地域に根ざし、農業者のビジネス化支援を中心に活動している。

